

平成 29 年度

順天堂大学大学院スポーツ健康科学研究科 修士論文

日本語版 The Prosocial and Antisocial Behavior
in Sport Scale の開発

学籍番号 4116043

氏名 村山 悠

論文指導教員 川田 裕次郎

合格年月日 平成 30 年 2 月 19 日

論文審査員 主査 川田 裕

副査 中野 誠

副査 川田 裕次郎

H29 年度 大学院スポーツ健康科学研究科

目次

第1章 緒言.....	1
第2章 文献考証.....	3
第1節 社会的行動.....	3
第2節 向社会的行動.....	3
第3節 反社会的行動.....	6
第4節 競技場面に於ける社会的行動.....	7
第3章 目的.....	10
第4章 方法.....	11
第1節 調査時期と調査対象.....	11
第2節 調査手続き.....	12
第3節 質問紙の構成.....	12
第4節 倫理的配慮.....	15
第5節 分析方法.....	15
第5章 結果.....	17
第1節 日本語版 PABSS の質問項目に対する項目分析.....	17
第2節 日本語版 PABSS の妥当性.....	20
第3節 日本語版 PABSS の信頼性.....	24
第6章 考察.....	25
第1節 日本語版 PABSS の妥当性と信頼性.....	25
第2節 日本語版 PABSS の因子.....	26
第3節 研究の限界と今後の課題.....	28
第7章 結論.....	29
第8章 謝辞.....	30
Summary.....	31
引用文献.....	32
添付資料	

第1章 緒言

近年、スポーツ基本法の制定に伴いスポーツ基本計画が策定され、スポーツを通じて目指す社会の姿の一つとして「青少年が健全に育ち、他者との協同や公平さと規律を重んじる社会」が謳われた²³⁾。さらに、東京オリンピック・パラリンピックを含む、平成29年度～33年度に関して掲げられた第2期スポーツ計画²²⁾においても同様のことが言われている。これらは、全ての人々が幸福で豊かな生活を営むためのツールとして、スポーツを提案するものであり、スポーツのもつ意義と価値が人々に良い影響を及ぼすことを示している。そのため、スポーツへの参加（する・みる・ささえる）により得られるメリットは、個人としても社会全体としても大きいと考えられる。また、スポーツの教育的価値の一つとして人間的成長を促進することがあげられる。しかしながら、競技者の中には暴力やいじめなど社会的に望ましくない行動を行う者も見受けられ³⁰⁾、長谷川⁸⁾は、中高運動部の1～2割において部員間のいじめや暴力が存在していることを報告している。加えて、競技者の中には、非行や薬物乱用といった心理的または行動的な問題も多く存在する。

いじめや暴力といった問題行動を心理学の領域では、反社会的行動と表している。反社会的行動とは「他者に害や損害を与える行動」¹⁶⁾であり、社会的に望ましくない行動をさす。反対に、向社会的行動は「他者の利益を意図した自発的な行動」⁶⁾と定義されており、社会的に望ましい行動をさしている。これらの社会的行動に関する研究は1970年代から社会心理学や発達心理学の領域で盛んに行われてきた。国内で行われている社会的行動に関する研究では、困っている人や援助を求めている人に対する「援助行動」や「親切行動」などの日常場面に焦点を当てた研究がほとんどであり、スポーツ心理学の領域における競技場面に着目した研究は見受けられない。

そのような中で、社会的行動の概念を競技場面に応用した Kavussanu & Boardley¹⁵⁾は、競技場面の向社会的および反社会的行動を測定する尺度（The Prosocial and Antisocial Behavior in Sport Scale: PABSS）を開発し、チームメイトと対戦相手への向社会的および反社会的行動の実態を明らかにした。この尺度開発をきっかけに、指導者の指導スタイル¹¹⁾やスポーツ参加²¹⁾と社会的行動の関連をみる研究が多くなされ、国外のスポーツ心理学の領域において広がりを見せた。一方で、国内においては、競技場面の社会的行動に着目した研究は見受けられない。加えて、

PABSSのような競技者の社会的行動について測定する日本語版の尺度は、今日までに開発されていない。そのため、日本国内においては、スポーツ心理学の領域における社会的行動に関する研究が海外に比べると発展しておらず、社会的行動の実態が不明のままである。

そこで本研究では、Kavussanu & Boardley¹⁵⁾が作成した PABSS に倣い、競技場面の社会的行動を測定する日本語版尺度を作成し、妥当性と信頼性を検討することを目的とする。これによって、日本のスポーツ心理学における社会的行動の国内研究の発展に寄与できると考えられる。また、競技場面の社会的行動を測定する尺度を作成することによって、日常場面と競技場面での行動を関連づけることが可能となるだろう。そして、競技者の向社会的行動および反社会的行動が把握できることにより、向社会的行動を促進し、反社会的行動を抑制していくことでスポーツの教育的価値の1つである人間的成長を支援できると考えられる。これらのことから、スポーツで培った社会的行動が日常場面の社会的行動に繋がるかを示すための第1歩になると考えられる。

第2章 文献考証

第1節 社会的行動

社会的行動は社会的に望ましい行動とされる「向社会的行動 (prosocial behavior)」と社会的に望ましくない行動とされる「反社会的行動 (antisocial behavior)」の2つに分類される。これらの社会的行動に関する研究は1970年代に確立され、その後、社会心理学や発達心理学などの近接概念とともに発展してきた。以前から青少年の非行⁴⁾や攻撃性⁷⁾と関連のある反社会的行動に関して研究が進められてきたように、心理学領域では、劣っている面を修正し通常の状態に戻すことを主な目的としていた中で、近年は通常な状態から良い面をつくり向上させていくことに目的が変わりつつある。この傾向に影響を受け、向社会的行動を促進させ、反社会的行動を抑制するための研究が推し進められている概念である。

そのため、本研究においても、向社会的および反社会的行動の両概念に着目し、スポーツ心理学における社会的行動に関する研究を展開していく。そのためには、第2節にて向社会的行動の概要について説明し、先行研究を概観していく。第3節では、反社会的行動の概要について説明し、先行研究を概観していく。向社会的行動と反社会的行動について説明した上で、第4節では、競技場面における社会的行動について、先行研究を用いて向社会的および反社会的行動の重要性を言及していく。

第2節 向社会的行動

(1) 向社会的行動の定義

向社会的行動の定義は「他者の利益を意図した自発的な行動」⁶⁾とされている。これは具体的な報酬や社会的承認を目的とした利己的行動や、道徳的原則に従おうとする願望によって動機づけられた利他的行動(愛他的行動)など、幅広く行動を捉えられることが特徴として挙げられる。これまでの向社会的行動の定義には、1980年に Mussen & Eisenberg²⁸⁾の「外的な報酬を期待することなしに、他者や他の人びとの集団を助けようとしたり、こうした人びとのためになることしようとする行為」がある。この定義を基に菊池¹⁸⁾は、①他者の利益になり、他者への援助行動であること、②その行動による外的報酬を期待しないものであること、③その行動により自らに何らかの損失(時間・労力など)が生まれること、④当事者の自発的な行動であること

の4条件を全て備える行動を向社会的行動とした。この4条件は向社会的行動と他種の行動との違いを明らかにしたが、同時に向社会的行動と判断される行動はごく稀なものとなった。しかし、菊池¹⁸⁾が定めた定義には問題点が挙げられる。具体的には、4条件を考慮したときに行動の動機を正確に判断することが難しい点があげられ、近年の定義のように、行動の動機などを限定しないものに修正が加えられている。

(2) 向社会的行動の先行研究

1970年に入ってから海外では、向社会的行動に関する研究が進められてきた。主に共感性の概念に関連した研究であり、援助行動や愛他的行動などの近接概念とともに向社会的行動に関する研究が発展してきている。

一方、国内においては1980年代から向社会的行動の研究が進められた。主に発達心理学、教育心理学、社会心理学などの領域において向社会的行動に関する研究が進められている。しかしながら、これらの研究では、領域によって社会的行動の定義や概念が異なっている。そこで下記に各領域における向社会的行動や同様の概念に関する研究をまとめていく。

(i) 発達心理学に関する向社会的行動の研究

発達心理学の領域においては、向社会的行動と愛他的行動の概念を用いて研究がなされている。主な研究対象者は、幼児から高校生といった心理的な発達が著しい年代を中心に行われてきた。その中で菊池¹⁷⁾によると、向社会的行動の生起には、状況の認知（気づき）から始まり、向社会的判断と共感性、役割取得能力を媒介要因として最終的な意思決定と行動が行われる（図1）。そして、媒介要因として挙げられる3つの能力の発達により向社会的行動の動機や種類にも発達がみられることを示している。また、森下・庵田²⁵⁾は、親子関係と向社会的行動との関連を調査し、親の養育態度（受容的、統制的、拒否的）が子どもの向社会的行動に関連することを明らかにしている。

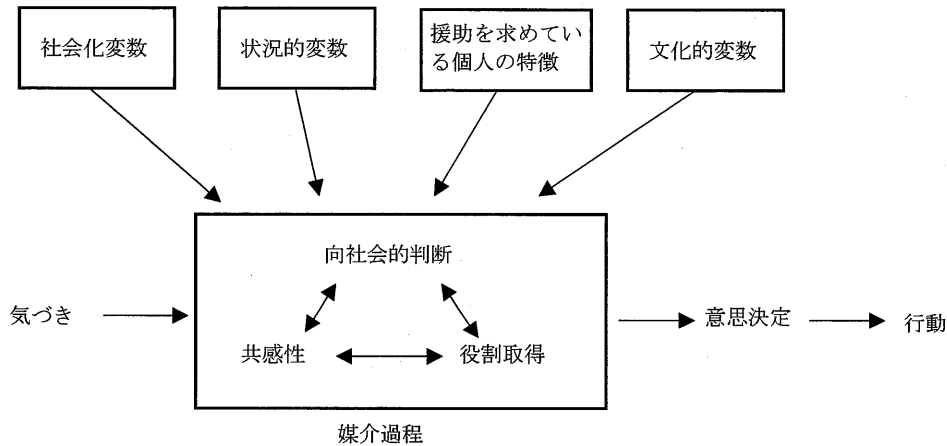


図1 向社会的行動の生起モデル 17)

(ii)教育心理学に関する向社会的行動の研究

教育心理学領域においては、向社会的行動と援助行動の概念を用いた研究が多くなされている。主な研究対象者は、発達心理学と同様に幼児から高校生年代が多い。向社会的行動や援助行動に関する先行研究を概観すると、いじめや学級崩壊などの諸問題と関連づけて向社会的行動の研究が行われている。具体的には、金子¹⁴⁾の研究では、生徒の向社会的行動を促進していくために、教師が能動的に関わっていくことが必要だと報告している。また、教育心理学の領域では、障害をもつ子どもに関する研究も多く見受けられる。その中で須藤³⁵⁾の研究では、自閉性障害児における援助行動を生起させる条件を検討した。その際には、援助行動を生起させるための弁別刺激を、①相手から援助を要請される言語刺激（言語刺激条件）、②相手の物品の不足という状況刺激（状況刺激条件）、③相手から援助を要求される言語刺激と観察反応を自発させる刺激（複合刺激条件）の3条件で統制して行われた。結果として全ての条件において援助行動が生起され、維持・般化されることが報告された。以上のことから、あらゆる教育場面において向社会的行動の重要性が指摘されている。

(iii)社会心理学に関する向社会的行動の研究

社会心理学領域においては、援助行動と愛他的行動の概念を用いた研究が盛んに行われている。この領域においてはボランティア活動などを取り上げ、社会一般的な人助けとして援助行動などを取り上げている。例えば、妹尾¹²⁾によると、ボランティア

活動においては援助行動による成果が大きいほど、その後も援助行動を継続させることを報告しており、このことは向社会的行動の研究においても同様の結果が報告されている^{26), 37)}。

以上、各領域において向社会的行動や同様の概念において研究がなされてきた。その際に向社会的行動を測定する尺度として、頻繁に使用されているのが、菊池¹⁸⁾が作成した向社会的行動尺度（大学生版）である。これは、日常場面における向社会的行動を測るもので、「列に並んでいて、急ぐ人のために順番をゆずる」や「知らない人が落として散らばった荷物を一緒に集めてあげる」などといった項目が挙げられる。そして、その後の研究においても、その時の生活様式や対象者に合わせて尺度を改変し扱っているものも多く見受けられる。このように、国内における向社会的行動に関する研究は日常場面を測定しているものが大半を占めている。

第3節 反社会的行動

(1)反社会的行動の定義

反社会的行動は Kavussanu et al.¹⁶⁾ によって「他者に害や損害を与える行動」と定義されている。国内においては、「社会に迷惑や気概を加えたりする行動。いわゆる、非行といわれる行動」²⁹⁾や「集団や社会の秩序を乱し、社会規範を無視したり、これに背反する行動」³⁶⁾などの定義がある。

本研究では上記の Kavussanu et al.¹⁶⁾ の定義を採用し社会の道徳的規範を逸脱した行動として広義で捉え、研究に用いることとした。

(2)反社会的行動の先行研究

これまで反社会的行動は問題行動の一部として含まれた形で研究が行われてきた。その中で、菅原ら³⁴⁾ は子どもの問題行動の発達に関して、生後 11 年間までの親子を対象に縦断研究を行い、家庭の社会経済的状況、親の養育態度および子どもに対する愛着感、夫婦関係、子どもの乳幼児期の気質的特徴といった要因が問題行動の出現に関与していると報告した。それと同時に、問題行動の防御因子として、父親の良好な養育態度や母親の父親に対する信頼感や愛情が重要であることも報告されている。

また、Wikström & Sampson³⁸⁾によると、地域社会といった個人の環境要因が反社会的行動の生起に影響を及ぼすとしている。具体的には、個人の属する地域社会や共同体が、自己統制や道徳性の発達を促進するものであったり、直接的に反社会的行動に接触する機会の少ない環境様式であれば、反社会的行動は抑制されるとしている。

これらのように、反社会的行動は発達心理学や教育心理学の領域を中心に研究がなされている。そして、この他においても犯罪防止を意図した臨床心理学や精神医学などといった、多岐にわたる学問領域において研究がなされている。

第4節 競技場面における社会的行動

(1) 競技場面における社会的行動の先行研究

現在では、競技場面の向社会的行動や反社会的行動などの社会的行動に関する研究は海外では盛んに行われているが、国内においてはほとんど見受けられないのが現状である。一方で、社会的行動に類似した概念として、ライフスキルや社会的スキルなどといった心理社会的スキルの概念を扱った研究は多く見受けられる。例を挙げると、島本・石井³³⁾や青木¹⁾により、体育や部活動がこれらのスキルを獲得する手立てとして有効なものであるか検証がなされている。そして、いずれのスポーツ活動においても心理社会的スキルの獲得につながる可能性が報告されている。

上記のようにライフスキルや社会的スキルの研究は国内でも行われているが、向社会的および反社会的行動に関する研究はほとんど行われてきていない。また、国内外において、社会的行動に関する研究の多くは日常場面を扱った研究がほとんどであり、海外で競技場面に着目した研究が行われ始めたのは、2000年以降のことであった。このことから、国内研究の発展が海外と同様、段階的に進んでいると考えられ、今後の国内研究においては、競技場面を想定した研究が進んでいくことが予想される。

(2) 競技場面における社会的行動を測定する尺度

競技者の社会的行動を測る指標として代表的なものは、Kavussanu & Boardley¹⁵⁾が作成した The Prosocial and Antisocial Behavior in Sport Scale (: PABSS) である。この尺度は「チームメイトに対する向社会的行動 (Prosocial behavior toward teammate: PT)」、「対戦相手に対する向社会的行動 (Prosocial behavior toward

opponent: PO)」、「チームメイトに対する反社会的行動 (Antisocial behavior toward teammate: AT)」、「対戦相手に対する反社会的行動 (Antisocial behavior toward opponent: AO)」の 4 因子 20 項目で構成されている。主な質問項目としては「チームメイトを励ました (PT)」、「倒れた対戦相手を起こそうと手を貸した (PO)」、「チームメイトに暴言を吐いた (AT)」、「対戦相手に怪我をさせようとした (AO)」などが挙げられる。この尺度の特徴的な点は 2 点あると考える。1 点目は、対象者をボディコンタクトの伴う集団競技者 (サッカー、ネットボール、ホッケー、ラグビー、バスケットボール) に限定している点である。そもそも競技スポーツは、個人競技と集団競技の 2 つに分類することができる。個人競技では陸上競技や水泳、剣道などが挙げられる。集団競技では、野球、サッカー、バスケットボールなどが挙げられる。個人競技と集団競技では、ボディコンタクトや仲間との連携 (チームプレー)、練習や試合中の対人行動頻度が大きく異なっていく。そのため、各競技によって競技特性が大きく異なり、競技によっては質問項目に該当しない可能性があるため、Kavussanu & Boardley¹⁵⁾ の PABSS では、ボディコンタクトのある集団競技者だけを対象として尺度を作成していた。

2 点目は、チームメイトと対戦相手のそれぞれに対して社会的行動を測定している点である。これまでの国内における社会的行動について測定する尺度^{18), 37)} では、対象となる相手を特定せず行動に視点を当てているものが大半を占めていた。しかしながら、PABSS では、設問となる対象者を 2 つに大別することで、社会的行動が生起される対象が明確になり、対象別の社会的行動の頻度を抽出できると考えられる。

これまでの研究においても、子どもの向社会的行動の生起頻度には、向社会的行動の受け手の特徴が関連していること⁹⁾が報告されており、菊池¹⁷⁾においても向社会的行動の相手が家族や友人などの身近な存在である場合と、他人といった無関係な存在である場合に関する研究を行う必要性を指摘している。これらを考慮すると、今後は、スポーツ心理学の領域において行動の対象を特定し本質的な社会的行動を抽出することが求められている。

しかしながら、日本国内においては、PABSS のような競技者の社会的行動について測定する尺度が、未だに開発されていない。PABSS では、集団競技者のみを対象とした点、設問となる対象がチームメイトと対戦相手である点を特徴としている。そのため、日本版の尺度を作成するにあたり、本研究においても Kavussanu & Boardley¹⁵⁾

の特徴を踏まえて尺度作成を行う必要があると考える。しかしながら、競技者の中には、個人競技であっても向社会的行動および反社会的行動を行う場面があると考えられる。例えば、陸上競技においても、5000mのレース中に選手の1人が脚を攣って苦しんでいる時に、肩を貸す競技者がいたこともある。一方で、水泳の試合で、わざと波をたてるような泳ぎをして、隣りのレーンの選手を妨害する競技者もいるかもしれない。そのため、尺度を作成するにあたり、調査対象者を集団競技に限定してしまうと、個人競技の競技者にはそもそも使用が出来ない点や個人競技の競技者の向社会的行動および反社会的行動について言及できない点が問題点として指摘できる。そのため、PABSSの尺度での、設問となる対象がチームメイトと対戦相手である特徴のみを採用し、日本語版の尺度では、個人競技と集団競技の競技者を対象に、尺度開発を行うこととする。

以上を踏まえ、日本語版 PABSS を検討することで、日常場面と競技場面での行動を関連づけることが可能になる。そして、スポーツへの参加が人々の豊かな生活を導くように、スポーツで培った心理的能力を日常場面に還元させるための一助となると考えられる。

第3章 目的

日本語版 The Prosocial and Antisocial Behavior in Sport Scale の妥当性と信頼性を検討することを目的とした。

第4章 方法

第1節 調査時期と調査対象

調査は本調査と再テストの2回実施した。

本調査は2017年7月上旬に行った。対象者は大学生競技者478名（有効回答84.0%）から男女・競技に関して調整を施した354名（男性213名、女性141名、平均年齢 19.7 ± 0.98 歳、個人競技175名、集団競技179名）であった。

また、同年7月下旬に再テストを行った。対象者は、本調査354名のうちランダムサンプリングした91名（男性61名、女性30名、平均年齢 20.3 ± 0.51 歳、個人競技46名、集団競技45名）であった。本調査と再テストにおける対象者の各競技種目の人数と割合は表1,2に示した。

表1 本調査における対象者の人数と割合

個人競技	人数 (割合)	集団競技	人数 (割合)
陸上競技	90 (25.4%)	サッカー	57 (16.1%)
体操競技	17 (4.8%)	バスケットボール	41 (11.6%)
剣道	13 (3.7%)	野球	32 (9.0%)
柔道	13 (3.7%)	バレーボール	25 (7.1%)
水泳	11 (3.1%)	ソフトボール	11 (3.1%)
自転車競技	7 (2.0%)	ハンドボール	8 (2.2%)
硬式テニス	7 (2.0%)	ラグビー	3 (0.8%)
ソフトテニス	5 (1.4%)	フットサル	2 (0.6%)
ライフセービング	5 (1.4%)		
スカッシュ	2 (0.6%)		
バドミントン	2 (0.6%)		
スキー	1 (0.3%)		
トライアスロン	1 (0.3%)		
バトントワリング	1 (0.3%)		

表 2 再テストにおける対象者の人数と割合

個人競技	人数 (割合)	集団競技	人数 (割合)
陸上競技	23 (25.2%)	サッカー	14 (15.4%)
剣道	6 (6.6%)	バスケットボール	10 (9.1%)
体操競技	4 (4.4%)	野球	7 (7.7%)
柔道	3 (3.3%)	バレーボール	7 (7.7%)
水泳	3 (3.3%)	ソフトボール	3 (3.3%)
ライフセービング	3 (3.3%)	ハンドボール	2 (2.2%)
自転車競技	2 (2.2%)	フットサル	2 (2.2%)
トライアスロン	1 (1.1%)		
スカッシュ	1 (1.1%)		

第 2 節 調査手続き

本調査と再テストともに、対象となる個人が在籍する学内の教室にて集合調査法の質問紙調査を行った。個人情報に配慮し十分なスペースを確保した上で調査を実施した。

第 3 節 質問紙の構成

本調査では以下の(1)～(4)を、再テストでは(1)と(2)を使用した。

(1)個人属性

個人属性の内容としては、年齢、学年、性別、専門競技、競技年数、チーム内での所属 (A チーム、2 軍など)、競技種目(長距離など)、競技でのポジション (MF、ショート、200mなど)、チームでの役割 (レギュラー、準レギュラー、非レギュラー、スタッフ)、大学入学後の競技成績 (国際大会、全国大会、地方大会、都道府県大会、地区大会) に関して回答を求めた。

(2)日本語訳した The Prosocial and Antisocial Behavior in Sport Scale (PABSS)

PABSS の原案を、スポーツ心理学を専攻とする大学院生 1 名と大学教員 1 名が日本語に訳し、英語を母国語とする日本語に堪能な大学教員にバックトランスレーションを依頼し、項目の等価性を確保したものを使用した。日本語訳の際には、原版尺度

がボディコンタクトを伴う集団競技であったのに対して、日本語版は個人競技にも対応させるため、質問項目の一部を改変（表 3）し実施した。具体的には、teammate の表記部分をチームメイト/練習仲間、opponent の表記部分を対戦相手/競争相手と改変した。本尺度は「チームメイトへの向社会的行動」「対戦相手への向社会的行動」

「チームメイトへの反社会的行動」「対戦相手への反社会的行動」の 4 因子 20 項目からなり、現在のシーズン中での行動頻度を「全くなかった(1点)」から「とてもよくあった(5点)」までの 5 段階評定で回答を求めた。質問項目は、「以下の各項目は、現在のシーズン中、どのくらいあなた自身にあてはまりますか？」という教示文章の後に回答を求めた。得点は各因子の合計得点により算出した。

表 3 PABSS の日本語訳一覧

因子名	項目番号	原版質問項目 (英語)	質問項目改編後
チームメイトに対する 向社会的行動 (Prosocial Behavior toward Teammate: PT)	1	Encouraged a teammate	チームメイト/練習仲間を励ました。
	5	Congratulated a teammate for good play	チームメイト/練習仲間のよいプレーをほめたたえた。
	10	Gave positive feedback to a teammate	チームメイト/練習仲間に肯定的なフィードバックを与えた。
	15	Gave constructive feedback to a teammate	チームメイト/練習仲間に建設的なフィードバックを与えた。
対戦相手に対する 向社会的行動 (Prosocial Behavior toward Opponent: PO)	6	Helped an injured opponent	怪我をした対戦相手/競争相手を助ようと行動した。
	11	Asked to stop play when an opponent was injured	対戦相手/競争相手が怪我をしたときに試合/競技を止めるよう求めた。
	18	Helped an opponent off the floor	倒れた対戦相手/競争相手を起こすために手を貸した。
チームメイトに対する 反社会的行動 (Antisocial Behavior toward Teammate: AT)	2	Verbally abused a teammate	チームメイト/練習仲間に暴言を吐いた。
	7	Swore at a teammate	チームメイト/練習仲間を罵った。
	12	Argued with a teammate	チームメイト/練習仲間と口論した。
	16	Criticized a teammate	チームメイト/練習仲間を非難した。
	19	Showed frustration at a teammate's poor play	チームメイト/練習仲間の下手なプレーに不満な態度をみせた。
対戦相手に対する 反社会的行動 (Antisocial Behavior toward Opponent: AO)	3	Tried to injure an opponent	対戦相手/競争相手に怪我をさせようとした。
	4	Tried to wind up an opponent	対戦相手/競争相手をイライラさせようとした。
	8	Deliberately fouled an opponent	対戦相手/競争相手に対してわざと反則をした。
	9	Intentionally distracted an opponent	わざと対戦相手/競争相手の気持ちを動揺させた。
	13	Retaliated after a bad foul	悪質な反則の後に仕返しをした。
	14	Intentionally broke the rules of the game	わざとルールを破った。
	17	Physically intimidated an opponent	対戦相手/競争相手に威圧的な態度をとった。
	20	Criticized an opponent	対戦相手/競争相手を非難した。

(3) 多元的共感性尺度

桜井³²⁾が Davis⁵⁾の多次元共感測定尺度を日本語訳したものを用いた。これは「視点取得」「共感的配慮尺度」「空想尺度」「個人的苦悩尺度」の4つの下位尺度によって構成されていた。各尺度は7項目ずつでできており、「全くあてはまらない(1点)」から「とてもよくあてはまる(4点)」までの4段階評定であった。得点は9項目の逆転項目に対し逆転処理を施し、全28項目の合計で得点を算出した。

(4) 日本語訳した目標志向性尺度

Roberts et al.³¹⁾が開発した、人の目標設定に関する傾向を測定する尺度 (the Perception of Success Questionnaire : POSQ) を、スポーツ心理学を専攻とする大学教員1名と大学院生1名により日本語訳されたものを用いた。これは「自我志向性」と「課題志向性」の2因子各6項目からなり、「全くあてはまらない(1点)」から「とてもよくあてはまる(5点)」の5段階評定であった。得点は「自我志向性」と「課題志向性」の各6項目の合計によって算出した。

第4節 倫理的配慮

本研究は順天堂大学大学院スポーツ健康科学研究科研究等倫理委員会の承認を得て実施した(倫理審査番号:院29-39)。倫理的配慮については、対象者は調査への回答が任意であり、回答途中でも回答を中断・拒否することができること、それによる不利益が生じることはないことを示した。また、調査への同意を求める手続きとして、調査同意書への署名を依頼した。その後、調査同意書と質問紙は別々に保管した上で、対象者をランダムに符合化し連結不可能匿名化を行うことで、個人情報の厳重な管理を徹底した。

第5節 分析方法

本研究では PABSS (The Prosocial and Antisocial Behavior in Sport Scale) の日本語版を検討するため、尺度の妥当性・信頼性の検討を行った。

まず、項目分析を行うため、20項目に対して Shapiro-Wilk の正規性の検定、Good-Poor Analysis (G-P 分析)、Item-Total Correlation Analysis (I-T 分析) を行った。その上で、構成概念妥当性の検討として日本語版 PABSS の因子構造を把握す

るため、探索的因子分析を行った。その際、原版 PABSS の作成方法と同様にするため、因子負荷量.40 以上を基準とした直接オブリミン回転（最尤法）を用いた。その後、確認的因子分析を用いて抽出された因子構造のモデル適合度の検討を行った。確認的因子分析の推定法は最尤法を用い、モデルの識別性を確保するため、各潜在変数の分散を 1 に拘束し、誤差変数から観測変数への各パスを 1 に拘束した。各適合度指標は、GFI（Goodness of Fit Index）、AGFI（Adjust GFI）、CFI（Comparative Fit Index）、RMSEA（Root Mean Square Error of Approximation）を用いた。その際のモデル適合度は Hair et al.⁹⁾の $\chi^2/df \leq 3.0$, GFI, AGFI, CFI $\geq .90$, RMSEA $\leq .08$ を基準とした。

次に基準関連妥当性を検討するため、日本語訳した PABSS、共感性尺度、目標志向性尺度の得点の関連を Spearman の順位相関分析を用いて検討した。

信頼性の検討では、内的一貫性を確認するため各因子で Cronbach の α 係数を算出し、再現性では、抽出された 3 因子に対して本調査と再テストの得点で級内相関係数（Intraclass correlation coefficient: ICC）を求めた。これらの分析では、統計解析ソフトとして IBM SPSS Statistics 22 と IBM SPSS Amos 22 を使用した。

第5章 結果

第1節 日本語版 PABSS の質問項目に対する項目分析

日本語版 PABSS の 20 項目に対して、統計的に質問項目の選定を行うため、Shapiro-Wilk の正規性の検定、G-P 分析、I-T 分析を行った。

(1) 質問項目の正規性の検討

日本語版 PABSS の 20 項目に対して回答の正規性を検討するため、Shapiro-Wilk の正規性の検定を行った。その結果、全 20 項目において 0.1%水準で有意となったため「変数は正規分布している」という帰無仮説が棄却された。したがって、全 20 項目の得点が正規分布していないことが示された。そのため、以後の分析をノンパラメトリック検定で行うこととした。

(2) Good-Poor Analysis (G-P 分析) の結果

日本語版 PABSS の合計得点において高い得点を示している者は、各項目でも高い得点を示していると考えられることから、向社会的および反社会的行動それぞれの合計得点における対象者の上位 25%を高群、下位 25%を低群に分類し、項目毎に平均値の差を求めるため Mann-Whitney の *U* 検定を行った。その結果、表 4 に示した通り全ての項目において 0.1%水準での有意差が確認された。

表 4 日本語版 PABSS 各項目の高群と低群の得点比較

質問項目	低群		高群		U値
	M	SD	M	SD	
1 チームメイト/練習仲間を励ました。	2.9	0.86	4.0	0.87	1838.0***
5 チームメイト/練習仲間のよいプレーをほめた たえた。	1.3	0.58	2.5	1.11	1970.0***
10 チームメイト/練習仲間に肯定的な フィードバックを与えた。	1.0	0.14	1.6	0.96	1182.0***
15 チームメイト/練習仲間に建設的な フィードバックを与えた。	1.1	0.51	2.6	1.27	734.5***
6 怪我をした対戦相手/競争相手を助ようと 行動した。	3.4	0.90	4.3	0.81	1911.0***
11 対戦相手/競争相手が怪我をしたときに 試合/競技を止めるよう求めた。	1.8	0.89	3.7	1.03	813.0***
18 倒れた対戦相手/競争相手を起こすために 手を貸した。	1.3	0.52	2.2	1.08	1927.0***
2 チームメイト/練習仲間に暴言を吐いた。	1.0	0.20	1.9	1.12	1481.0***
7 チームメイト/練習仲間を罵った。	1.1	0.24	2.6	1.22	1811.0***
12 チームメイト/練習仲間と口論した。	1.9	0.83	3.5	1.08	811.0***
16 チームメイト/練習仲間を非難した。	1.2	0.48	3.2	1.27	1490.0***
19 チームメイト/練習仲間の下手なプレーに 不満な態度をみせた。	1.2	0.45	3.0	1.16	1586.5***
3 対戦相手/競争相手に怪我をさせようとした。	1.0	0.10	1.8	1.06	3160.0***
4 対戦相手/競争相手をイライラさせよう とした。	1.0	0.00	1.6	0.93	1410.0***
8 対戦相手/競争相手に対してわざと反則を した。	1.4	0.69	3.1	0.89	2404.0***
9 わざと対戦相手/競争相手の気持ちを 動揺させた。	1.0	0.20	2.2	1.09	1161.0***
13 悪質な反則の後に仕返しをした。	1.0	0.20	2.4	1.23	2583.5***
14 わざとルールを破った。	1.2	0.41	3.1	1.36	2646.0***
17 対戦相手/競争相手に威圧的な態度をとった。	1.1	0.35	2.2	1.05	1468.0***
20 対戦相手/競争相手を非難した。	1.0	0.17	2.0	1.05	2007.0***

*** $p < .001$

(3)Item-Total Correlation Analysis (I-T 分析) の結果

日本語版 PABSS の各質問項目は大きく向社会的行動と反社会的行動の 2 通りに大別できる。そして向社会的および反社会的行動それぞれの合計得点と各質問項目は、相関関係がみられることが予想されるため、ノンパラメトリックの Spearman 相関分析を用いて検討を行った。その結果、全 20 項目において 1%水準で各合計得点との正の相関が確認された (表 5,6)。

表 5 I-T 分析結果 (向社会的行動)

	合計得点
向社会的行動合計得点	—
1 チームメイト/練習仲間を励ました。	.62**
5 チームメイト/練習仲間のよいプレーをほめたたえた。	.60**
10 チームメイト/練習仲間に肯定的なフィードバックを与えた。	.70**
15 チームメイト/練習仲間に建設的なフィードバックを与えた。	.66**
6 怪我をした対戦相手/競争相手を助ようと行動した。	.69**
11 対戦相手/競争相手が怪我をしたときに試合/競技を止めるよう求めた。	.66**
18 倒れた対戦相手/競争相手を起こすために手を貸した。	.66**

** $p < .01$

表 6 I-T 分析結果 (反社会的行動)

	合計得点
反社会的行動合計得点	—
2 チームメイト/練習仲間に暴言を吐いた。	.68**
7 チームメイト/練習仲間を罵った。	.65**
12 チームメイト/練習仲間と口論した。	.70**
16 チームメイト/練習仲間を非難した。	.64**
19 チームメイト/練習仲間の下手なプレーに不満な態度をみせた。	.66**
3 対戦相手/競争相手に怪我をさせようとした。	.42**
4 対戦相手/競争相手をイライラさせようとした。	.67**
8 対戦相手/競争相手に対してわざと反則をした。	.56**
9 わざと対戦相手/競争相手の気持ちを動揺させた。	.70**
13 悪質な反則の後に仕返しをした。	.52**
14 わざとルールを破った。	.51**
17 対戦相手/競争相手に威圧的な態度をとった。	.67**
20 対戦相手/競争相手を非難した。	.61**

** $p < .01$

第2節 日本語版 PABSS の妥当性

(1) 構成概念妥当性の結果

まず、日本語版 PABSS の因子構造を把握するため、全 20 項目を直接オブリミン回転（最尤法）により探索的因子分析を行った。因子負荷量は.40 以上を基準とした。その際、因子数は指定せずに行い、因子負荷量の基準に届かない項目と複数の因子に重複する項目は削除し、繰り返し分析を実施した。その結果、11 項目を除外した 3 因子 9 項目が抽出された。因子 1 と因子 3 は各 3 項目の「対戦相手に対する向社会的行動」と「チームメイトに対する向社会的行動」、因子 2 も 3 項目の「チームメイトに対する反社会的行動」となった（表 7）。

表 7 日本語版 PABSS の探索的因子分析結果

質問項目	F1	F2	F3	共通性
F1 対戦相手に対する向社会的行動				
11 対戦相手/競争相手が怪我をしたときに試合/競技を止めるよう求めた。	.82	.02	-.09	.60
18 倒れた対戦相手/競争相手を起こすために手を貸した。	.65	-.05	.03	.47
6 怪我をした対戦相手/競争相手を助ようと行動した。	.55	.02	.17	.43
F2 チームメイトに対する反社会的行動				
7 チームメイト/練習仲間を罵った。	-.02	-.81	-.04	.63
2 チームメイト/練習仲間に暴言を吐いた。	-.05	-.75	.04	.55
16 チームメイト/練習仲間を非難した。	.06	-.63	-.01	.42
F3 チームメイトに対する向社会的行動				
5 チームメイト/練習仲間のよいプレーをほめたたえた。	-.07	.02	.79	.56
1 チームメイト/練習仲間を励ました。	.03	.03	.69	.50
10 チームメイト/練習仲間に肯定的なフィードバックを与えた。	.15	-.08	.47	.34
因子間相関				
F1	—			
F2	-.31	—		
F3	.53	-.11	—	
抽出後の負荷量平方和	27.8	43.5	49.9	

次に、(1)で抽出された 3 因子構造モデルに対して確認的因子分析を行った (図 2)。その結果、 $\chi^2 = 43.84$, 自由度 24, GFI = .97, AGFI = .95, CFI = .98, RMSEA = .05 となった。統計的な許容基準⁹⁾ ($\chi^2/df \leq 3.0$, GFI, AGFI, CFI $\geq .90$, RMSEA $\leq .08$) から考慮すると十分な数値が得られ、適合度の高いモデルであることや構成概念妥当性が示された。

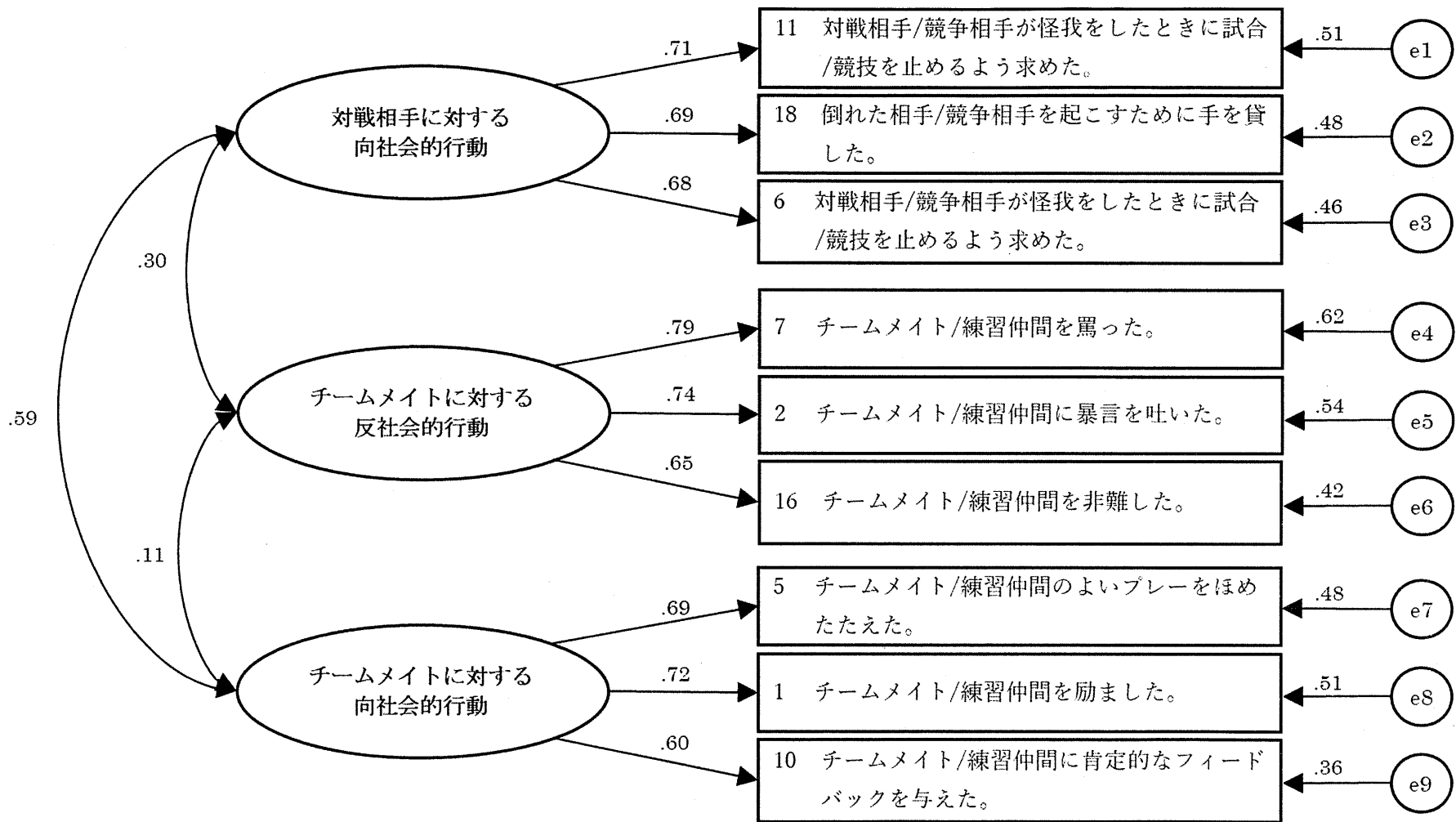


図2 日本語版 PABSS の確認的因子分析結果

(2) 基準関連妥当性

基準関連妥当性の検討のため、日本語版 PABSS (3 因子構造モデル)・共感性尺度・目標志向性尺度において Spearman の順位相関分析を実施した (表 8)。その結果、因子 3「チームメイトに対する向社会的行動」と課題志向性間に弱い正の相関 ($r = .26$, $p < .01$) が確認された。そのほかの因子では、相関が確認されなかった。原版 PABSS と部分的に同様の結果が得られたことから基準関連妥当性は部分的に指示された。

表 8 日本語版 PABSS (3 因子構造モデル)・共感性尺度・目標志向性尺度における Spearman の順位相関分析結果

	共感性	自我志向性	課題志向性
F1 対戦相手に対する向社会的行動	.10	-.19**	.18**
F2 チームメイトに対する反社会的行動	-.02	.15**	.17**
F3 チームメイトに対する向社会的行動	.02	-.13*	.26**

* $p < .05$, ** $p < .01$

第3節 日本語版 PABSS の信頼性

信頼性（内的一貫性、再現性）の検討のため、信頼性分析と本調査－再テスト間における級内相関係数の算出を行った。

(1)内的一貫性の検討

抽出された3因子に対して信頼性分析を実施し、Cronbachの α 係数を求めた。その結果、因子1「対戦相手に対する向社会的行動」において $\alpha=.74$ 、因子2「チームメイトに対する反社会的行動」において $\alpha=.77$ 、因子3「チームメイトに対する向社会的行動」において $\alpha=.70$ となった。

(2)再現性の検討

再現性の検討のため、抽出された3因子に対して本調査と再テストの得点で級内相関分析を行った。その結果、因子1「対戦相手に対する向社会的行動」において $ICC=.55$ 、因子2「チームメイトに対する反社会的行動」において $ICC=.73$ 、因子3「チームメイトに対する向社会的行動」において $ICC=.49$ と、全て0.1%水準で有意な中程度以上の正の相関²⁰⁾が確認された。

第6章 考察

本研究の目的は日本語版 The Prosocial and Antisocial Behavior in Sport Scale の妥当性と信頼性を検討することであった。

第1節 日本語版 PABSS の妥当性と信頼性

日本語版 PABSS に対する妥当性（構成概念妥当性、基準関連妥当性）および、信頼性（内的一貫性、再現性）の検討の結果を以下にまとめていく。

(1) 日本語版 PABSS の妥当性の検討

はじめに日本語版 PABSS の構成概念妥当性の検討として、20項目に対して探索的因子分析を用い因子構造の検討を行った。その結果、20項目中11項目が削除され各3項目の3因子が抽出された。なお、削除した基準として、因子負荷量.40に満たない項目、複数の因子で重複がみられる項目を削除した。3因子は原版 PABSS を基に、因子1は「対戦相手に対する向社会的行動」、因子2は「チームメイトに対する反社会的行動」、因子3は「チームメイトに対する向社会的行動」と命名した。

しかし、原版 PABSS にみられた「対戦相手に対する反社会的行動」因子は全項目が削除される結果となった。この因子の質問項目としては、「対戦相手/競争相手に対してわざと反則をした」や「対戦相手/競争相手を非難した」などが該当した。これらが削除に至った原因を考えると、日本と海外での文化や国民性による感情表出の違いが関連していると考えられる。Averill¹⁸⁾は、怒りの表出が相手にはより攻撃的な行動として捉えられやすいと報告しており、反社会的行動は主に怒りの表出による行動だと推測できる。そして、原版 PABSS は、イギリス人を対象に作成されたものであり、Argyle et al.²⁾は、怒りの表出に関して、日本人はイギリス人などに比べて、他者に対する怒りの表出を抑制すると指摘している。さらに、木野¹⁹⁾は日本人の怒りの表出方法を明らかにし、「表情・口調」、「遠まわし」、「いつもどおり」というような、抱いている怒り感情を抑制的または間接的に伝える方法が多く使用されていることを報告している。つまり、日本人の特徴である感情の抑制が、社会的行動の生起の抑制にもつながっていると考えられる。また、「対戦相手に対する反社会的行動」因子の各項目得点の平均を原版と日本語版とで比較しても、「対戦相手/競争相手に対してわざと反則をした」においては原版で $M=2.4$ ($SD=1.14$) なのに対し、日本語版は $M=.13$

($SD = 0.71$)、「対戦相手/競争相手を非難した」においては原版の $M = 2.9$ ($SD = 1.07$) に対し、日本語版が $M = 1.3$ ($SD = 0.73$) と、8項目中4項目で1点以上低い数値が確認された。これらのことから、日本人の特徴的な感情表出が社会的行動の生起にも作用し、「対戦相手に対する反社会的行動」因子の削除に至ったと考えられる。

次に、モデル適合度の検討として、3因子構造モデルに対して確認的因子分析を行った。その際のモデル適合度は、統計的な基準⁹⁾により判断され良好な数値が得られた。このことから、3因子構造モデルは、モデル適合度の観点において良好なものであり、構成概念妥当性が示された。

そして、基準関連妥当性の検討においては、原版 PABSS と同様に、抽出された3因子と共感性、目標志向性との関連を検討した。結果として、因子3「チームメイトに対する向社会的行動」と課題志向性の間に有意な弱い正の相関が確認された。これは原版 PABSS と部分的に同様の傾向を示しており、部分的に基準関連妥当性は示されたと考えられる。

(2)日本語版 PABSS の信頼性の検討

信頼性の検討として、内的一貫性と再現性を採用し分析を行った。まず、内的一貫性を検討するため抽出された3因子に対して信頼性分析を実施し、Cronbach の α 係数を求めた。因子1から順に $\alpha = .74, .77, .70$ と、3因子全てにおいて基準値¹⁰⁾の0.7を上回っており、内的一貫性が示された。

また、再現性を検討するため、3因子の各合計得点において本調査と再テストの級内相関分析を実施した。結果として、因子1から順に $ICC = .55, .73, .49$ と、いずれの因子においても有意な中程度以上の相関²⁰⁾が確認され、一定の再現性が示された。

第2節 日本語版 PABSS の因子

本研究において、日本語版 PABSS の因子として、3因子が抽出された。以下に各因子の説明をしていく。

(1)対戦相手に対する向社会的行動

原版 PABSS における「対戦相手に対する向社会的行動」因子の3項目が、本研究においてもまとめ、1つ目の因子として抽出された。質問項目としては「対戦相手/競争相手が怪我をしたときに試合/競技を止めるよう求めた」、「倒れた対戦相手/競争相

手を起こすために手を貸した」、「怪我をした対戦相手/競争相手を助ようと行動した」といった項目から、困っている他者に対する救助行動に関連する項目内容で構成されている。既存の向社会的行動尺度¹⁸⁾は、「列に並んでいて、急ぐ人のために順番をゆずる」や「知らない人が落として散らばった荷物を一緒に集めてあげる」といった、他者に対する思いやり行動全般を捉えているのに対し、日本語版 PABSS においては、救助行動やそれを求める援助行動が抽出された点において特徴的である。以上のことから、「対戦相手に対する向社会的行動」の得点が高い場合、競技場面に特徴づけられた向社会的行動の影響が高いと考える。

(2) チームメイトに対する反社会的行動

原版 PABSS における「チームメイトに対する反社会的行動」因子 5 項目のうち、3 項目がまとまり 2 つ目の因子として抽出された。質問項目としては「チームメイト/練習仲間を罵った」、「チームメイト/練習仲間に暴言を吐いた」、「チームメイト/練習仲間を非難した」といった項目から、他者（チームメイトや練習仲間）に対してネガティブなコミュニケーションを行う項目内容で構成されている。これらの項目は、攻撃性尺度¹⁹⁾といった類似した尺度が存在している。具体的には、「腹を立てて、人を蹴ったことがある」、「怒鳴られたら、怒鳴り返す」などの項目があるが、これらは身体的にダメージを与える行動を評定している。それに対し、日本語版 PABSS は暴言や罵りなどのように心理的にダメージを与える点が特徴的である。以上のことから、「チームメイトに対する反社会的行動」の得点が高い場合、反社会的行動を頻繁に行う傾向があると考えられる。

(3) チームメイトに対する向社会的行動

原版 PABSS における「チームメイトに対する向社会的行動」因子 4 項目のうち、3 項目がまとまり 3 つ目の因子として抽出された。質問項目としては「チームメイト/練習仲間のよいプレーをほめたたえた」、「チームメイト/練習仲間を励ました」、「チームメイト/練習仲間に肯定的なフィードバックを与えた」といった項目から、他者（チームメイトや練習仲間）に対してポジティブなコミュニケーションを行う項目内容で構成されている。因子 1 の「対戦相手に対する向社会的行動」に比べ、近い人間関係にある他者との間で行われる向社会的行動と予想される。家族、友だち、見知らぬ人に

対する向社会的行動を調査した村上ら²⁷⁾によると、小中学生年代における向社会的行動は、家族に対する行動に比べ、友だちに対する行動が増えていく結果を示している。本研究におけるチームメイトと練習仲間は、村上らの研究でいう友だちと同様の立場と考えられるため、親密な関係をもつ他者に対する向社会的行動の指標として正確であり、有用性も有していると考えられる。以上のことから、「チームメイトに対する向社会的行動」の得点が高い場合、向社会的行動が多いと考える。

以上のように、日本語版 PABSS では 3 つの因子が抽出された。これらの評定を総合的に評価することで、競技場面における個人内の社会的行動の傾向が明らかになると考えられる。そして、日本語版 PABSS を用いて日常場面と競技場面それぞれの社会的行動の関連を明らかにすることで、これまで以上に向社会的行動と反社会的行動の実態が明らかとなり、日常場面に還元できる研究が可能になると考えられる。

第 3 節 研究の限界と今後の課題

本研究の限界として、以下の 2 点が挙げられる。

1 点目は、質問項目の表現についてである。原版 PABSS では、対象者をボディコンタクトの伴う集団競技者として、限定的に調査を行っていた。それに対し、本研究においては、個人競技者も対象としており、競技特性として該当しえない質問項目が含まれていた可能性が考えられる。また、日本語版 PABSS の質問項目が個人競技の反社会的行動を抽出できる表現でなかった可能性も考えられる。そのため、項目の選定において、個人競技者に対して回答ができるように表現を工夫する必要があると考える。もしくは、個人競技者用、集団競技者用にそれぞれ向社会的行動と反社会的行動を測定する尺度を開発する必要があるかもしれない。

2 点目は対象者の年齢についてである。原版 PABSS においては対象者を 12 歳から 64 歳の競技者としているのに対し、本研究では大学生競技者のみを対象としたことで大学生のみにおける社会的行動が抽出された可能性が考えられる。今後は対象者に幅広い年齢層の競技者を設定し、多くの日本人に該当する項目かを明らかにしていく必要があるかもしれない。

これらの点を考慮する必要があると考えるが、日本語版 PABSS は一定の信頼性と妥当性を有していることから、日本人の向社会的および反社会的な行動の特徴を捉えている尺度と考えられる。

第7章 結論

本研究から、日本語版 The Prosocial and Antisocial Behavior in Sport Scale の妥当性と信頼性が検証され本尺度の実用可能性が示された。そして、全9項目の3因子構造モデルが抽出され、各因子を「対戦相手に対する向社会的行動」、「チームメイトに対する反社会的行動」、「チームメイトに対する向社会的行動」から成る日本語版 PABSS が作成された。

第8章 謝辞

本論文の執筆にあたり、多くの方々のご指導やご協力を賜りましたことを、心より感謝申し上げます。

この2年間指導教員としてご指導いただきました川田裕次郎助教には、感謝してもし切れません。川田先生はどんな時も情熱を抱き続け、愛情をもって私と向き合ってくださいました。圧倒されることも多々ありましたが、根気強くご指導いただいたことで、今の私がいると感じております。私は未だ力不足の面も多いですが、川田先生のように、何事にも全力な教員になれるよう精進してまいります。

また、柴田展人教授と広沢正孝客員教授をはじめとする精神保健学研究室の皆様には、合同研究会をはじめ多くの場面でご指導いただきました。誠にありがとうございます。特に山口慎史さんには、優しさと厳しさ両方をもってご指導いただきました。何かとトラブルを巻き起してきた私ですが、山口さんが救いの手を差し伸べて下さったことで乗り越えて来られました。本当にありがとうございました。

ならびに、主査の四方田清教授、副査の中嶽誠先任准教授には、論文執筆に不可欠なご指摘・ご指導をいただき、より深く研究を進めることができました。誠にありがとうございました。

そして、研究室の皆様、特に同級生の金子洋平さん、清水駿さん、鋤崎隆也さん、中家寛貴さんに心より感謝申し上げます。いつも騒がしい研究室で、多くの刺激を受けた2年間になりました。これからも刺激し成長し合える関係でいられるようお願いしております。

最後に、これまで支えてくれた家族に、心より感謝申し上げます。この順天堂大学大学院で培ったものを、次のステップで発揮できるよう、そして、これまでの感謝の気持ちを少しずつでも返していけるよう日々精進してまいります。

本研究に対しご指導・ご協力いただいた全ての方々に、改めて感謝の意を表し本論文の謝辞とさせていただきます。誠にありがとうございました。

Summary

Development of a Japanese version of the Prosocial and Antisocial Behavior in Sport Scale

Yu Murayama

Background and Purpose

Although prosocial behavior (voluntary behavior aiming at another's benefit) is expected in sports settings in terms of sports education, antisocial behavior (behavior aiming at harming others) has been observed. To grasp these situations, the Prosocial and Antisocial Behavior in Sport Scale (PABSS) was developed. However, in Japan, no Japanese version of this scale has been developed. Thus, social behaviors (prosocial and antisocial behavior) in Japanese athletes have not been clarified. Therefore, this study aimed to examine the validity and reliability of the Japanese version of the PABSS.

Method

We conducted a questionnaire twice: a main survey and retest. Participants were 354 university athletes in the main survey; 91 of them were retested. The PABSS was translated into Japanese using back-translation. The questionnaire consisted of demographic information, the Japanese-translated PABSS, empathy, and goal orientation. For the analysis, we carried out Item analysis (Shapiro-Wilk test, Good-Poor analysis, and Item-Total analysis). After that, to examine construct- and criterion-related validity, we conducted exploratory factor analysis, confirmatory factor analysis, and Spearman correlation analysis. In addition, to test reliability (internal consistency and reproducibility), we calculated Cronbach's α and intraclass correlation coefficients between PABSS scores on the main survey and retest.

Results and Discussion

No items of the Japanese-version PABSS had normal distribution. Items had no statistical problems. In confirmatory analysis, three factors models of nine items were extracted with sufficient construct validity. Then, Spearman's correlation analysis showed sufficient criterion-related validity. In the analysis of reliability, internal consistency and constant reproducibility were confirmed for each factor.

Conclusions

Validity and reliability of the Japanese-version PABSS was confirmed. The Japanese version of the PABSS, consisting of "prosocial behavior toward opponents," "antisocial behavior toward teammates," and "prosocial behavior toward teammates," was developed. This scale can be used to grasp the characteristics of social behavior in Japanese athletes.

引用文献

- 1) 青木邦男 (2005). 高校運動部員の社会約スキルとそれに関連する要因. 国立オリンピック記念青少年総合センター研究紀要, 5, 25-34.
- 2) Argyle, M., Henderson, M., Bond, M., Iizuka, Y., & Contarello, A. (1986). Cross-cultural variations in relationship rules. *International Journal of Psychology*, 21, 287-315.
- 3) Averill, J.R. (1982). *Anger and aggression*. New York: Springer-Verlag.
- 4) Brennan, T., & Auslander, N. (1979). *Adolescent loneliness: An exploration study of social and psychological pre-dispositions and theory (Vol. 1)*. Bethesda, MD: National Institute of Mental Health, Juvenile Problems Division.
- 5) Davis, M.H. (1983). Measuring individual differences in empathy: Evidence for a multidimensional approach. *Journal of Personality and Social Psychology*, 44, 113-126.
- 6) Eisenberg-Berg, N., Fabes, R.A., & Spinrad, T. (2006). *Handbook of child psychology: Social emotional, and personality development (6th ed.)*. 3, 646-718.
- 7) 濱口佳和・石川満佐育・三重野祥子 (2009). 中学生の能動的・反応的攻撃性と心理社会的不適応との関連—2種類の攻撃性と反社会的行動欲求および抑うつ傾向との関連—, *教育心理学研究*, 57, 393-406.
- 8) 長谷川祐介 (2013). 高校部活動における問題行動の規定要因に関する分析の試み—指導者の暴力、部員同士の暴力・いじめに着目して—. *大分大学教育福祉科学部研究紀要*, 35(2), 153-163.
- 9) Hair, J.F., Black, W., Babin, B., Anderson, R. E., & Tatham, R. L. (2005). *Multivariate data analysis(5th ed.)*. Upper Saddle River, NJ: Prentice Hall.
- 10) 羽山由美子 (1989). 看護研究の進め方と実際: 測定尺度の信頼性と妥当性の査定(1). *看護*, 41(6), 64-71.
- 11) Hodge, K., & Lonsdale, C. (2011) Prosocial and Antisocial Behavior in Sport: The Role of Coaching Style, Autonomous vs. Controlled Motivation, and Moral Disengagement. *Journal of Sport and Exercise Psychology*, 33(4), 527-547.

- 12) 妹尾香織・高木修 (2003). 援助行動経験が援助者自身に与える効果：地域で活動するボランティアに見られる援助成果. *社会心理学研究*, 18, 2, 106-118.
- 13) 磯部美良・菱沼悠紀 (2007). 大学生における攻撃性と対人情報処理の関連—印象形成の観点から. *パーソナリティ研究*, 15, 290-300.
- 14) 金子泰之 (2011). 中学生の問題行動動機と問題行動の関係—<規範文化の低い学校>と<規範文化の高い学校>の比較からの検討—. *カウンセリング研究*, 44, 199-208.
- 15) Kavussanu, M., & Boardly, I. (2009). The prosocial and antisocial behavior in sport scale. *Journal of Sport & Exercise Psychology*, 31, 97-117.
- 16) Kavussanu, M., Seal, A.R., & Phillips, D.R. (2006). Observed prosocial and antisocial behaviors in male soccer teams: Age differences across adolescence and the role of motivational variables. *Journal of Applied Sport Psychology*, 18, 326-344.
- 17) 菊池章夫 (1984). 向社会的行動の発達. *教育心理学年報*, 23, 118-127.
- 18) 菊池章夫 (1988). 思いやりを科学する—向社会的行動の心理とスキル—. 川島書店.
- 19) 木野和代 (2000). 日本人の怒りの表出方法とその対人的影響. *心理学研究*, 70, 6, 494-502.
- 20) Landis, JR., & Koch GG. (1977). The measurement of observer agreement for categorical data. *Biometrics*, 33, 159-174.
- 21) Li, C., Koh, K.T., Wang, C.K.J., & Chian, L.K. (2015). Sports participation and moral development outcomes: Examination of validity and reliability of the prosocial and antisocial behavior in sport scale. *International Journal of Sports Science and Coaching*, 10(2-3), 505-514.
- 22) 文部科学省 (2011). スポーツ基本法 (平成 23 年法律第 78 号) http://www.mext.go.jp/a_menu/sports/kihonhou/index.htm, (参照日 2017 年 9 月 17 日).
- 23) 文部科学省 (2012). スポーツ基本計画. http://www.mext.go.jp/a_menu/sports/planindex.htm, (参照日 2017 年 9 月 17 日).
- 24) 文部科学省 (2017). 第 2 期スポーツ基本計画. <http://www.mext.go.jp/sports/bmenu/sports/mcatetop01/list/1372413.htm>, (参照日 2017 年 9 月 17 日).

- 25) 森下正康・庵田奈甫 (2005). 幼児期の親子関係と向社会的行動・攻撃行動のモデリング. 和歌山大学教育学部教育実践総合センター紀要, 15, 47-56.
- 26) 森下正康・信濃淑子 (1995). 向社会的行動の動機因子に関する研究. 和歌山大学教育学部紀要, 教育科学, 45, 29-44.
- 27) 村上達也・西村多久磨・櫻井茂男 (2016). 家族, 友だち, 見知らぬ人に対する向社会的行動—対象別向社会的行動尺度の作成—. 教育心理学研究, 64, 156-169.
- 28) Mussen, P., & Eisenberg-Berg, N. (1980). Personality correlates of sociopolitical liberalism and conservatism in adolescents. *Journal of Genetic Psychology*, 137, 165-177.
- 29) 長尾勲 (1993). 生徒指導. 長尾勲・武田忠輔・柳井修・鼻地勝人 (編), 新教育心理学, ナカニシヤ出版, 149-162.
- 30) 根上優・藤田紀昭 (1989). スポーツ/バイオレンスの社会学. 体育・スポーツ社会学研究 8 : 1, 1-25.
- 31) Roberts, G.C., Treasure, D.C., & Balague, G. (1998). Achievement goals in sport: The development and validation of the Perception of Success Questionnaire. *Journal of Sports Sciences*, 16, 337-347.
- 32) 桜井茂男 (1988). 大学生における共感と援助行動の関係—多次元共感測定尺度を用いて—. 奈良教育大学紀要 (人文・社会), 37, 149-154.
- 33) 島本好平・石井源信 (2009). 体育授業におけるスポーツ経験が大学生のライフスキルに与える影響. *スポーツ心理学研究*, 34(2): 127-136.
- 34) 菅原ますみ・北村役則・戸田まり・島悟・佐藤達哉・向井隆代 (1999). 子どもの問題行動の発達: Externalizing な問題傾向に関する生後 11 年間の縦断研究から. *発達心理学*, 10, 32-45.
- 35) 須藤 (2008). 自閉性障害児における援助行動を生起させる条件の検討—援助者の観察反応を通して—. *教育心理学研究*, 56, 268-277.
- 36) 田川二照 (2003). 反社会的問題行動. 内山喜久雄・坂野雄二 (編), 子どもをとりまく問題と教育 4 問題行動の見方・考え方, 開隆堂出版, 39-56.
- 37) 高木修 (1998). セレクション社会心理学 7 人を助ける心—援助行動の社会心理学—. サイエンス社.

- 38) Wikström, P.O.H., & Sampson, R.J. (2003). Social mechanisms of community influences on crime and pathways in criminality. In B.B. Lahey, T.E. Moffitt, & A. Caspi (Eds.), *Causes of conduct disorder and juvenile delinquency*. New York: Guilford Press. 118-148.

添付資料

1. 本調査の質問紙
2. 再テストの質問紙

アンケート調査ご協力をお願い

この調査は、大学スポーツ選手における競技中の行動と心理状態を調べるために行うものです。

以下の説明をお読みいただき、回答をしていただけますよう、お願い申し上げます。

○ご記入いただいた内容を調査・研究以外の目的に使用することはありません。

○この調査への回答は任意です。

回答したくない場合、部分的もしくは全体的に回答を拒否することができます。

また、回答の途中でも回答を辞めなくなったときには、回答を中断することもできます。

回答を拒否・中断することによって不利益が生じることはありません。

○質問に対して、正しい答え・間違った答えというものはありません。

周りの人と相談せず、思い浮かんだ回答をそのままご記入ください。

○研究への同意には、下記の調査同意書、2ページ目以降への回答が必要となります。

指導教員：順天堂大学 スポーツ健康科学部

助教 川田 裕次郎

研究責任者：順天堂大学大学院 スポーツ健康科学研究科 村山 悠

連絡先（研究責任者）：junmu171@gmail.com

調査同意書

順天堂大学大学院スポーツ健康科学研究科 村山悠 殿

研究課題名「大学生スポーツ選手における競技中の行動と心理状態」

上記研究課題の内容について、研究実施者より説明を受け、その内容を十分理解した上で、アンケート調査に協力することに

同意する・同意しない

という意志を表明いたします。

学籍番号 _____ 氏名 _____

同意年月日 _____ 平成 _____ 年 _____ 月 _____ 日 _____

質問1. はじめに、あなたの年齢、性別、学年、現在取り組んでいるスポーツ名、そのスポーツの

年齢 () 歳

学年 () 年生

性別 (男 ・ 女)

スポーツ名 _____ そのスポーツの競技年数 () 年

そのスポーツでの所属や種目 (Aチーム, 2軍, 長距離, スタッフなど) _____

そのスポーツでのポジション (MF, GK, ショート, SF, 200mなど) _____

質問2. あなたは、そのチームにおいて、以下の3つのうち、どれに当てはまりますか？

以下の当てはまる番号に、丸をつけてください

1. レギュラー (毎試合、毎大会、ほぼ確実にスタメン・先発・出場する)
2. 準レギュラー (スタメン・先発ではないものの、試合に出場する機会がある)
3. 非レギュラー (ほとんど試合に出場したことがない・メンバーに選ばれたことがない)
4. スタッフ (学生コーチ, マネージャー, トレーナー)

質問3. あなたの、大学入学後の最高戦績を、以下の当てはまる番号に、丸をつけてください。

1. 国際大会 (世界大会, オリンピック, ユニバーシアードなど)
2. 全国大会 (インカレ, 総理大臣杯, DENSO, 国体など)
3. 地方大会 (リーグ戦, 1リーグ, 社会人リーグなど)
4. 出場なし
5. その他 → 具体的にお答えください _____

質問. あなたの競技場面での行動頻度についてお聞きします。以下の各項目は、現在のシーズン中、どのくらいあなた自身にあてはまりますか？ それぞれ最もあてはまると思う数字を、○印で囲んでください。

質問項目		全く な か つ	や や あ つ た	時 々 あ つ た	よ く あ つ た	と て も よ く あ つ た
1	チームメイト/練習仲間を励ました。	1	2	3	4	5
2	チームメイト/練習仲間に暴言を吐いた。	1	2	3	4	5
3	対戦相手/競争相手に怪我をさせようとした。	1	2	3	4	5
4	対戦相手/競争相手をイライラさせようとした。	1	2	3	4	5
5	チームメイト/練習仲間のよいプレーをほめたたえた。	1	2	3	4	5
6	怪我をした対戦相手/競争相手を助ようとして行動した。	1	2	3	4	5
7	チームメイト/練習仲間を罵った。	1	2	3	4	5
8	対戦相手/競争相手に対してわざと反則をした。	1	2	3	4	5
9	わざと対戦相手/競争相手の気持ちを動揺させた。	1	2	3	4	5
10	チームメイト/練習仲間に肯定的なフィードバックを与えた。	1	2	3	4	5
11	対戦相手/競争相手が怪我をしたときに試合/競技を止めるよう求めた。	1	2	3	4	5
12	チームメイト/練習仲間と口論した。	1	2	3	4	5
13	悪質な反則の後に仕返しをした。	1	2	3	4	5
14	わざとルールを破った。	1	2	3	4	5
15	チームメイト/練習仲間に建設的なフィードバックを与えた。	1	2	3	4	5
16	チームメイト/練習仲間を非難した。	1	2	3	4	5
17	対戦相手/競争相手に威圧的な態度をとった。	1	2	3	4	5
18	倒れた対戦相手/競争相手を起こすために手を貸した。	1	2	3	4	5
19	チームメイト/練習仲間の下手なプレーに不満な態度をみせた。	1	2	3	4	5
20	対戦相手/競争相手を非難した。	1	2	3	4	5

質問. あなたの対人関係における考え方についてお聞きします。以下の各項目は、どのくらいあなた自身にあてはまりますか？ それぞれ最もあてはまると思う数字を、○印で囲んでください。

質問項目	全くあてはまらない	あまりあてはまらない	ややあてはまる	あてはまる	
1	こんな事が起こるのではないかと、起こりそうな事をよく想像する。	1	2	3	4
2	自分よりも不幸な人たちには、やさしくしたいと思う。	1	2	3	4
3	他の人たちの立場に立って、物事を考えることは困難である。	1	2	3	4
4	困っている人たちがいても、あまりかわいそうだという気持ちにはならない。	1	2	3	4
5	小説を読んでいて、登場人物に感情移入することがある。	1	2	3	4
6	緊急な状況では、どうしてもなく不安な気持ちになる。	1	2	3	4
7	映画や劇をみても、平常心で、のめり込むことはない。	1	2	3	4
8	何かを決定する時には、自分と反対の意見を持つ人たちの立場にたって考えてみる。	1	2	3	4
9	運動などの試合では、負けている方に応援したくなる。	1	2	3	4
10	感情が高ぶると、無力感に襲われる。	1	2	3	4
11	友達をよく理解するために、彼らの立場になって考えようとする。	1	2	3	4
12	よい本や映画に夢中になることは、まれである。	1	2	3	4
13	傷ついた人を見ても、冷静な方である。	1	2	3	4
14	周りの人たちが不幸でも、自分は平気でいられる。	1	2	3	4
15	日分の判断が正しいと思う時には、他の人たちの意見は聞かない。	1	2	3	4
16	劇や映画を見ると、自分が登場人物のひとりになったように感じる。	1	2	3	4
17	緊張状態になると、ひどくビクビクする。	1	2	3	4
18	不公平な扱いをされている人たちを見ても、あまりかわいそうとは思わない。	1	2	3	4
19	緊急状態でも、比較的うまく対処できる。	1	2	3	4
20	ときどき、自分の目の前で突然起こったことに、感動することがある。	1	2	3	4
21	どんな問題にも対立する二つの見方(意見)があると思うので、その両方を考慮するように努める。	1	2	3	4
22	もし自分を紹介するとしたら、やさしい人というと思う。	1	2	3	4
23	すばらしい映画を見ると、すぐ自分を主演の人物に置き換えてしまう。	1	2	3	4
24	緊急時には、どうしてよいか、わからなくなる。	1	2	3	4
25	ある人に気分を悪くされても、その人の立場になってみようとする。	1	2	3	4
26	おもしろい小説を読んでいる時、もしその中の事件が自分に起こったらどうだろうと、よく想像する。	1	2	3	4
27	緊急事態で、ひどく援助を必要とする人を見ると、とりみだしてしまう方である。	1	2	3	4
28	人を批判する前に、もし自分がその人であったならば、どう思うであろうかと考えるようにしている。	1	2	3	4

質問. 競技においてあなたの達成感を得る場面に関してお聞きします。例文の〇〇に各項目を当てはめたとき、どのくらいあなた自身にあてはまりますか？ それぞれ最もあてはまると思う数字を、〇印で囲んでください。

例文：「スポーツ場面において、〇〇に最もうまくやれたと感じる。」

質問項目		全くあてはまらない	あまりあてはまらない	どちらでもない	ややあてはまる	とてもよくあてはまる
1	自分がほかの人を打ち負かしたとき	1	2	3	4	5
2	自分が明らかに優れていると感じたとき	1	2	3	4	5
3	自分が1番であると感じたとき	1	2	3	4	5
4	自分が一生懸命に取り組んだとき	1	2	3	4	5
5	自分が個人的な改善を明らかに示せたとき	1	2	3	4	5
6	自分が対戦相手/競争相手より優れているとき	1	2	3	4	5
7	自分が目標に到達したとき	1	2	3	4	5
8	自分が困難を克服したとき	1	2	3	4	5
9	自分が個人の目標に到達したとき	1	2	3	4	5
10	自分が勝ったとき	1	2	3	4	5
11	自分が1番であることをほかの人に示したとき	1	2	3	4	5
12	自分が最大限の力を発揮したとき	1	2	3	4	5

アンケート調査ご協力をお願い

この調査は、大学スポーツ選手における競技中の行動と心理状態を調べるために行うものです。

以下の説明をお読みいただき、回答をしていただけますよう、お願い申し上げます。

○ご記入いただいた内容を調査・研究以外の目的に使用することはありません。

○この調査への回答は任意です。

回答したくない場合、部分的もしくは全体的に回答を拒否することができます。

また、回答の途中でも回答を辞めなくなったときには、回答を中断することもできます。

回答を拒否・中断することによって不利益が生じることはありません。

○質問に対して、正しい答え・間違った答えというものはありません。

周りの人と相談せず、思い浮かんだ回答をそのままご記入ください。

○研究への同意には、下記の調査同意書、2ページ目以降への回答が必要となります。

指導教員：順天堂大学 スポーツ健康科学部

助教 川田 裕次郎

研究責任者：順天堂大学大学院 スポーツ健康科学研究科 村山 悠

連絡先（研究責任者）：junmu171@gmail.com

調査同意書

順天堂大学大学院スポーツ健康科学研究科 村山悠 殿

研究課題名「大学生スポーツ選手における競技中の行動と心理状態」

上記研究課題の内容について、研究実施者より説明を受け、その内容を十分理解した上で、アンケート調査に協力することに

同意する・同意しない

という意志を表明いたします。

学籍番号 _____ 氏名 _____

同意年月日 _____ 平成 _____ 年 _____ 月 _____ 日

質問1. はじめに、あなたの年齢、性別、学年、現在取り組んでいるスポーツ名、そのスポーツの

年齢 () 歳

学年 () 年生

性別 (男 ・ 女)

スポーツ名 _____ そのスポーツの競技年数 () 年

そのスポーツでの所属や種目 (Aチーム, 2軍, 長距離, スタッフなど) _____

そのスポーツでのポジション (MF, GK, ショート, SF, 200mなど) _____

質問2. あなたは、そのチームにおいて、以下の3つのうち、どれに当てはまりますか？

以下の当てはまる番号に、丸をつけてください

1. レギュラー (毎試合、毎大会、ほぼ確実にスタメン・先発・出場する)
2. 準レギュラー (スタメン・先発ではないものの、試合に出場する機会がある)
3. 非レギュラー (ほとんど試合に出場したことがない・メンバーに選ばれたことがない)
4. スタッフ (学生コーチ, マネージャー, トレーナー)

質問3. あなたの、大学入学後の最高戦績を、以下の当てはまる番号に、丸をつけてください。

1. 国際大会 (世界大会, オリンピック, ユニバーシアードなど)
2. 全国大会 (インカレ, 総理大臣杯, DENSO, 国体など)
3. 地方大会 (リーグ戦, 1リーグ, 社会人リーグなど)
4. 出場なし
5. その他 → 具体的にお答えください _____

質問. あなたの競技場面での行動頻度についてお聞きます。以下の各項目は、現在のシーズン中、どのくらいあなた自身にあてはまりますか？ それぞれ最もあてはまると思う数字を、○印で囲んでください。

質問項目		全く な か っ た	や や あ っ た	時 々 あ っ た	よ く あ っ た	と て も よ く あ っ た
1	チームメイト/練習仲間を励ました。	1	2	3	4	5
2	チームメイト/練習仲間に暴言を吐いた。	1	2	3	4	5
3	対戦相手/競争相手に怪我をさせようとした。	1	2	3	4	5
4	対戦相手/競争相手をイライラさせようとした。	1	2	3	4	5
5	チームメイト/練習仲間のよいプレーをほめたたえた。	1	2	3	4	5
6	怪我をした対戦相手/競争相手を助ようと行動した。	1	2	3	4	5
7	チームメイト/練習仲間を罵った。	1	2	3	4	5
8	対戦相手/競争相手に対してわざと反則をした。	1	2	3	4	5
9	わざと対戦相手/競争相手の気持ちを動揺させた。	1	2	3	4	5
10	チームメイト/練習仲間に肯定的なフィードバックを与えた。	1	2	3	4	5
11	対戦相手/競争相手が怪我をしたときに試合/競技を止めるよう求めた。	1	2	3	4	5
12	チームメイト/練習仲間と口論した。	1	2	3	4	5
13	悪質な反則の後に仕返しをした。	1	2	3	4	5
14	わざとルールを破った。	1	2	3	4	5
15	チームメイト/練習仲間に建設的なフィードバックを与えた。	1	2	3	4	5
16	チームメイト/練習仲間を非難した。	1	2	3	4	5
17	対戦相手/競争相手に威圧的な態度をとった。	1	2	3	4	5
18	倒れた対戦相手/競争相手を起こすために手を貸した。	1	2	3	4	5
19	チームメイト/練習仲間の下手なプレーに不満な態度をみせた。	1	2	3	4	5
20	対戦相手/競争相手を非難した。	1	2	3	4	5